

1 はじめに

長岡聾学校高等部産業技術科（以下、本科）には普通学級4名、重複障害（聴覚障害及び知的障害）学級3名、計7名の生徒が在籍している。補聴器等を装着することで会話ができる生徒から、補聴器を装着しても会話が困難な生徒まで、障害の程度はさまざまである。生徒同士は主に手話と指文字でコミュニケーションをとり、生徒と教員は口話や手話、指文字、筆談でコミュニケーションをとっている。

昨年度実施した生徒及び教員対象のアンケート結果から、学校生活においては情報保障がしっかりとされているため、生徒自身は聴覚障害による困り感をあまり感じていないことが分かった。しかし、聴者である教員側には、「指導者の伝えたいことが正しく伝わっていない」などの課題がある。また、少人数のため他者と関わる機会や、自分の考えを大勢の前で表現する場面が少ない。そこで、卒業後を見据え、積極的に校外に出て地域の聴者と交流する中で、不足しているコミュニケーション力に気付き、自ら他者と協働する力、自分の考えを表現する力を育成したいと考えた。

2 実践内容

本科では、交流活動を中心とした社会とつながる活動の一つとして、総合的な学習の時間で「探求的な学習」を計画した。目的は、「地域とのつながりの中でコミュニケーション力の向上を目指す」、「危機管理能力の育成」である。中越地震で大きな被害にあった長岡市内の山古志地域を訪問し、危機的な状況の中で自分に必要な配慮を自ら要求できるようになることを目指して学習を行った。

(1) 防災教育

山古志地域の探求的な学習の一環として、長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」で中越地震について学習し、災害時の危機的な状況の中で、聴覚障害者の立場からどのような困難が想定され、どのような備えや配慮が必要になるかを考えた。

事前学習では、DVD「映像で知る、地震の物語」を見たり、中越地震の際の当校の被害状況を写真で確

認したりして、震災時に人々がどのように行動したか、大地震の時に想定される状況や普段からできる備えは何かを考えた。さらに、聴覚障害者であるがゆえの災害時の困難とその解決方法を考えて発表し合った。生徒の発表には次のような内容が多くあった。

聴覚障害者としての困難	解決方法
<ul style="list-style-type: none"> ・アナウンスによる情報が得られず状況が分からない。 ・停電になると手話や口話が見えない。 ・周囲の人は手話が分からない。 ・指示が分からず何をすればいいか分からない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの人に聞く。 ・筆談をお願いする。 ・文字による情報保障を依頼する。

聴覚障害者は音声による情報を得にくいため、周囲の状況を的確に判断し素早く避難行動をとることが難しい。また、聞こえないということを周囲が気付きにくいため、周囲からの配慮は期待できない。そのため、事前の備えが必要であること、必要な配慮を自ら要求しなければならないことが分かった。

これを受けて「きおくみらい」では、日頃からどのような備えが必要か、自分にはどのような配慮が必要か、どうやって必要な配慮を要求するかを自宅・外出中・避難場所の3つの場面に分けて学習した。すぐに行える対策や自治体の支援制度の利用方法、状況を知るための手段や自分の状況を知らせる方法を具体的に学んだ。例えば、防災グッズチェックリストを使い、自分に必要な備えを確認したり、災害用伝言板のテスト入力やLINEのステータスメッセージを入力したりした。また、中越地震や東日本大震災を体験した聴覚障害者の体験談を紹介してもらい、自分の身に置き換えて考えることができた。この学習を通じて、災害時は個人の事情に合わせた支援が遅れがちであること、災害前に自分が何に困るかを考えて準備することが大切であることを学んだ。一方で、災害伝言板を使う際に、生徒が自分の携帯電話番号を記憶していないため入力できない場面もあった。これを機に家族でお互い

の携帯電話番号を確認したり、災害時の連絡方法を確認したりするなど、家族間のコミュニケーションの必要性を感じた。

事後学習においては、生徒がそれぞれの考えを発表し、発表を聞いて課題を共有し、各自の考えを深めることができた。



(2) 地域交流

これまでの防災教育で学習した内容を念頭に置いて、「災害からの復興～山古志探求～」として、山古志地域を訪問した。山古志復興交流館「おらたる」や山古志地域各所で中越地震の被害や復興の状況を学んだり、被災した方の体験談を聞いたりして、今後の危機管理について考えた。さらに、合理的配慮の観点から、「おらたる」で視聴した震災の地形模型シアターについて、聴覚障害者の立場に立った情報保障のあり方を考えた。最後に学習内容を ICT 機器を用いてまとめ、学部内で発表するとともに、機会をみて「おらたる」にも発信する予定で活動している。

①山古志地域の探求

山古志復興交流館「おらたる」を基点とし、マイクロバスを利用して水没した旧木箆集落など地域各所を見学した。現地では住民ガイドの方から当時の様子や復興の歩み等、丁寧な説明をしていただいた。事前学習を行っていたものの、実際に自分の目で見て、話を聞くことで、生徒には新たな気づきが見られた。

【生徒の感想】

○山古志の人たちが被災しても諦めない心が現れている写真や言葉だらけだった。また、当時の長島村長が行ったことを詳しく知ることができて良かった。地震で崩れた道路などを雪が来るまでに復旧させた「生き残る」という深い執念、集落の付き合いでお互いを助け合う思いやり、仮設住宅でも孤独死を防ぐ工夫や・プライバシーへの配慮等がされていることが分かった。

○実際に生で見ると、映像よりも当時の震災の悲惨さが伝わってきた。



②中越地震の体験談

山古志地域在住の方から中越地震の体験をお話しいただいた。地震が起きた時のこと、ライフラインが全てとまった中、近所の人たちと助け合って一夜を過ごしたこと、夜が明けて周囲を見たときの衝撃、長岡市に全村避難した時のこと、山古志に帰ってからのこと等、生の声で語っていただいた。特に生徒の印象に残った内容は次の3つである。

○山古志は全てのライフラインがとまっており、自分たちがどのような状況におかれているかを知ったのは全村避難をしてからだった。

○阪神淡路大震災の教訓を生かして、地域ごとにまとまって仮設住宅に入居したため、今までと同じ顔を見ながら生活できたので安心だった。

○辛い避難生活の中でも何かしら自分で生きるすべは見つけられるという前向きな姿勢。

生徒は、震災当時は想像以上に過酷な状況であったことを知り、災害時に情報を得る難しさや、人と人とのつながりの大切さを改めて感じていた。そして、聴覚障害がある自分たちが同じ状況におかれた時にどう行動するかを真剣に考えるきっかけとなった。

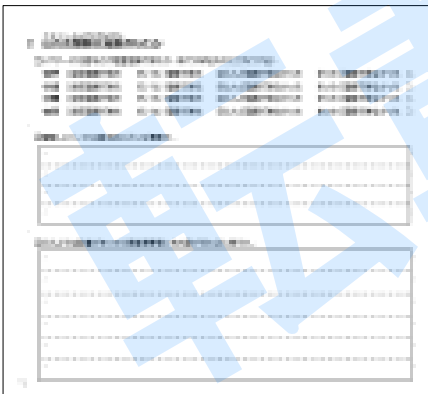
山古志訪問の際の情報保障は、職員による手話通訳と要約筆記で行った。生徒自身は「自分は聞こえているから手話がなくても大丈夫」「手話を見れば大丈夫」「手話がよく分からない」等、意識に差はあるものの、事後学習でワークシートを確認したら、ほとんどの生徒が要約筆記の内容に頼っていた。自分では聞こえていると思っている生徒も、「聞こえているが時々聞き取れない事があり、その内容を考えているうちに話が進んで分からなくなる」とのことであった。手話がよく分からない生徒も自分から要約筆記を依頼することはしなかった。この段階では、自分にとって必要な配慮は何かを考え、要求することはまだできていなかった。



③情報保障のあり方について

山古志復興交流館「おらたる」には、震災の地形模型シアターがあり、プロジェクションマッピングの手法を用いて視覚・音声・音楽・文字などで表現されている。職員が下見に行った際、臨場感があり聴者にとっては非常に分かりやすいが、暗い部屋の中で聴覚障害がある生徒にとってどの程度理解できるか疑問を持った。そのため、おらたるを訪問した際には、自分たちに必要な情報保障のあり方を考える活動を取り入れることにした。

地形模型シアターを2回視聴することにし、1回目は情報保障なしで見た。どの程度理解できたかを確認して2回目を視聴した。2回目は部屋を少し明るくし、手話通訳を付けた。視聴後、理解しにくい場面やどのような配慮があったら聴覚障害者にも内容が伝わるか、理解できるかを考えワークシートに記入した。(資料1)



生徒の記入内容をまとめると次のようになった。

【シアターの内容をどの程度理解できたか（1回目）】

	全部理解 できた	だいたい理解 できた	ほとんど理解 できなかった	まったく理解 できなかった
音声	2	2	1	1
映像	6	0	0	0
字幕	5	1	0	0
音楽	4	1	1	0

○ナレーションの声が聞こえず、ポイントのみの字幕だけでは理解できない。

○字幕の漢字が分からないところがあった。

○だいたい聞こえるが、似たような音があり分からないところもあった。

○映像の奥側が見にくかった。

【シアターの内容をどの程度理解できたか（2回目）】

○ナレーションは早かったが、どんな内容なのかは手話無しと比べて分かりやすかった。

○手話が見えるように室内を明るくしたので、映像が見にくくなった。

【どのような配慮があれば聴覚障害者にも伝わるか】

○映像と一緒にナレーションの字幕を付ける。

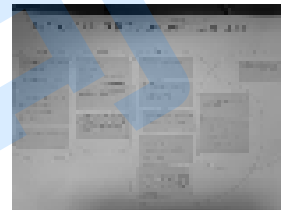
○手話通訳を付ける。

○ナレーションの原稿を事前に読んでおく。

○モニターを設置し字幕と解説する人の映像を流す（口形が見えるように）。

○手元にタブレットを配布し字幕を流す。

事後学習では生徒が話し合い、聴覚障害者の立場から、工夫・配慮してほしいことを洗い出した。



○音声…ナレーションの早さをゆっくりにしてほしい。

○映像…見えやすいところにモニターを設置して、同じ映像を流してほしい。

○字幕…ナレーションの字幕を付けてほしい。

タブレットを配布して字幕を流してほしい。

○配置…山古志が端にあって座っている所から見えにくかったので、山古志を中央に配置してほしい。

さらに、これらの意見から必要な情報保障は何かを考えた。様々な案の中から、聴覚障害者だけでなく、映像が見えにくい視覚障害者や日本語が分からない外国人にも対応できるというメリットがあると考え、次のような結論に至った。様々な立場に立っての情報保障を考えられたことは大きな進歩といえる。

「おらたるからタブレットを貸し出す」

- ・流す内容は「字幕つき映像」「映像のみ」を選択できる。
- ・音声や字幕は日本語だけでなく、訪れる外国人のことも考えて、英語や中国語などの外国語も用意する。
- ・タブレットとともにイヤホンも提供する。



④ICT 機器を用いたまとめ

当校では、ICT 機器を用いた情報発信もコミュニケーション能力の1つと考え、メディア学習を積極的に取り入れている。山古志探求の内容を「中越地震について」「中越地震の体験談」「情報保障の提案(資料2)」

「山古志の地域文化」の内容でパワーポイントを使ってまとめ、文化祭に展示した。今後、「長岡野菜を使った給食メニューの考案」を加えて学部内での発表を行い、機会をみて「おらたる」にも発信していきたい。

3 成果と課題

①成果

中越防災安全機構「きおくみらい」では、災害時は個人の事情に合わせた支援が遅れがちであること、災害前に自分が何に困るかを考えて準備しておくことが大切であることを学んだ。この学習をとおして、生徒自身が平常時から自分に必要な備えや配慮は何かを考え、自ら積極的に支援や配慮を要求する必要があることを意識するようになった。

山古志探求では、震災映像の情報保障のあり方についても考えた。震災時の状況、復興に向けたさまざまな取り組みを聴覚障害者が理解するためには、どのような工夫があると良いか、そして、社会への出口にいる生徒自身が自分にとって必要な配慮を求める一歩として、山古志復興交流館「おらたる」に発信していく方法を計画した。学習を始めた当初は、情報保障をしてもらって当たり前と考え、手話が分からなくても自分から要約筆記を依頼することもなかったが、学習を進める中で、自分にとって必要な情報保障は何かを考え、要求する力が付いてきた。

②課題

状況に応じたコミュニケーション能力の育成を目指し、さまざまな活動を計画し、実施してきた。(資料3) 学校での学習は、コミュニケーションを意識し、少しずつ力が付いてきたように感じる。しかし、活動を通じて、生徒自身は「聞こえている」「分かっている」と思っている、実際には分かっている場面が多く見られた。校内手話通訳派遣制度(資料4)等を利用し

て、自分にとって本当に必要な情報保障は何なのか、さらに考え、要求する力を今後も育成していきたい。

また、家庭でのコミュニケーションの必要性も課題として挙げられる。日常的に、本当に伝わっているのか、分かっているのかをお互いに確認する場面が少ないのではないかと。災害時の避難場所や連絡方法などについて家族で話し合う機会が必要である。さらに、聴覚障害者は電話が使えないためメールでのやり取りが主となる。その中で、日本語での表現力不足により正しく伝わらないという状況も想定される。このような状況を改善するために、危機管理を生徒だけの学習にとどめず、家庭で家族と一緒に考える活動に広げることが必要であると考えた。

4 おわりに

活動をとおして見えてきた課題を克服するために、NPO法人ふるさと未来創造堂から講師を招き、生徒と保護者を対象に「家族で考える もしもの備え」というテーマでの活動を今年度中に実施する。情報収集ツールや情報伝達ツールの紹介と実践をとおして、家族と災害時の対応を考え、日頃の備えにつなげる。生徒は広範囲から自力で通学しているが、通学途中で災害が発生した場合どう対処したらいいのか。具体的な場面を想定し、「誰に、何を、どのように伝えるか」を親子で考える。高等部同様に遠方より自力で通学している中学部との合同学習により、学部の枠を超えて居住地域を考慮したグループワークを実施し、普段話し合う機会の少ないグループで、それぞれの地域での取り組みや各家庭での実践などの情報交換を行う。また、家族で話し合った内容をもとに「我が家の防災ポケットメモ」を作成し、常に身に付けておけるようにする。これを家庭配布することで、各家庭の情報交換と家族間のコミュニケーションにつなげたい。

自分は何に困るのかを把握し必要な配慮や支援を要求する力、周囲とコミュニケーションをとり協力する力、自治体等の支援制度を活用する力は、社会に出て行く生徒にとって必要不可欠なものである。今回は危機管理能力の育成というテーマでの活動を通じて、「災害時」という状況に応じたコミュニケーション能力を高める取り組みを行ったが、今後も様々な状況に応じたコミュニケーション能力の向上を目指した取り組みを続けていきたい。

資料1 防災学習ワークシート

防災学習ワークシート

1. 防災学習の目的

2. 防災学習の意義

3. 防災学習の重要性

4. 防災学習の効果

5. 防災学習の方法

6. 防災学習の評価

7. 防災学習の課題

8. 防災学習の展望

9. 防災学習のまとめ

10. 防災学習の感想

防災学習ワークシート

1. 防災学習の目的

2. 防災学習の意義

3. 防災学習の重要性

4. 防災学習の効果

5. 防災学習の方法

6. 防災学習の評価

7. 防災学習の課題

8. 防災学習の展望

9. 防災学習のまとめ

10. 防災学習の感想

資料2 生徒が作成したパワーポイント資料

「おらたる」のシアターを見て、聞こえない人には行われるのか？

1. 2. 3.

4. 5. 6.

7. 8. 9. 10.

11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20.

21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30.

31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40.

41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50.

51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60.

61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70.

71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80.

81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90.

91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

資料3 「状況に応じたコミュニケーション能力の育成」の活動

市内の高校との交流活動



ながおか i-con でのプレゼン

すこやか・ともしびまつりへの参加



手話表現

手話検定の練習

発表



資料4 校内手話通訳派遣制度

